目次

一 訓読の基礎

1 送りがな……3
2 返り点……4
　基本練習……5
3 助字（助辞）……6
4 書き下し文……8
　基本練習……9
　発展演習……11

二 基本の句形

1 再読文字……12
　基本練習……14
　発展演習……16
2 簡単な否定と禁止……18
　基本練習……19
3 全部否定と部分否定……20
　基本練習……20
4 二重否定……22
　基本練習……23
5 特殊な否定……24
　基本練習……24
　発展演習……26
6 使役……29
　基本練習……29
　発展演習……31
7 受身……34
　基本練習……34
　発展演習……37
8 疑問と反語……39
（1） 疑問反語共通の形……40
　基本練習……42
　発展演習……45
（2） 疑問を主とする形……46
　基本練習……46
（3） 反語を主とする形……48
　基本練習……50
　発展演習……52
9 比較と選択……56
　基本練習……58
　発展演習……60
10 仮定……63
　基本練習……64
11 抑揚……65
　基本練習……65
　発展演習……67
〔付録〕漢詩……69
　基本練習……70

一 訓読の基礎

1 送りがな

〔古代の中国人の書き残した文章や詩を日本文に直して読むとき、読みやすくするために用言の活用語尾や助詞・助動詞などを補う。これが送りがなである。〕

1 漢字の右下に、カタカナで小さく添える。

2 文語文法に従い、歴史的仮名づかいで送る。

〈例〉

○日出ヅ。　　（読み方）○日出づ。

○月白ク風清シ。　　○月白く風清し。

○大器ハ晩成ス。　　○大器は晩成す。

◈注意◈

(1) 活用語には、原則としてその活用語尾を送る。

(2) 副詞は原則として最後の一字を送る。

(3) 送りがなのつけ方は、教科書や参考書により多少の違いもあるが、文意を明らかにして、誤読しないようなつけ方さえすれば、あまり気にする必要はない。

問 下のひらがなの文を参照して、漢文に送りがなをつけよ。

① 花開鳥歌。　　はなひらき、とりうたふ。

② 日暮道遠。　　ひくれて、みちとほし。

③ 父母俱存。　　ふぼともにそんす。

④ 孔子聖人。　　こうしはせいじんなり。

2 返り点

〔漢文は、上から下へそのまま読むのが原則である。しかし、文の構造が日本文と違うため下から上へ返って読む場合があり、その返読の記号を返り点という。〕

記号	用法	読む順番
レ点	真下の一字からその上の一字に返って読む。	2レ 1
一・二点	二字以上離れた下の字から上の字に返って読む。	3二 1 2一
上・(中・)下点	かならず一・二点をつけた句をはさんで、さらに上の字へ返って読む。	5下 3二 1 2一 4上

〈例〉

○読レ書ヲ。　(読み方)　。書を読む。

○渡ル二黄河ヲ一。　。黄河を渡る。

○有リ下好ム二漚(かもめ)鳥ヲ一者上。　。漚鳥を好む者有り。

◆注　意◆

(1) 返り点を読む順番は、レ点や一・二点が先で、上(中)下点はそのあとである。

(2) レ点と一・二点、上(中)下点の結びついた形もある。記号は、ロ・点を使い、二ロ・三ロ・中レ・下レなどは使えない。たとえば、□二□ □ロ□とあれば、4二 1 3ロ 2 の順に読む。

(3) 下から返って読む熟語には、熟語の間に「-」を加え、返り点は□二-□……□一のようにつける。たとえば、□二□ □一とあれば、2二-3 1一 の順に読む。なお、明らかに熟語とわかるような場合には「-」線を省くこともある。

○ 次にあげる字は訓読する際に必ず返り点で返って読む字である。これらを返読文字という。

不・弗・非	ず あらズ	否定	
無・莫・勿・毋	なシ なカレ	否定 禁止	
可	ベシ	可能・当然	
使・令	しム	使役	
見・被	る らル	受身	
如・若	ごとシ	比況	
自・従	より	起点	
与	より と	比較 並列・従属	

基本練習

為	ため二	目的 原因・理由	
雖	(〜ト) いへどモ	仮定逆接 確定逆接	
多・少	おほシ すくなシ		
易・難	やすシ かたシ		
数量			
難・易			
所	ところ	——のこと、——のもの	
所以	ゆゑん	原因・理由、方法・手段	
欲	ほっス	願う。——したい。今にも——し(なり)そうである。	

1 □の中に、読む順番を数字で書き入れよ。

① □レ□□レ□　② □レ□レ□　③ □レ□二□一　④ □レ□二□一

⑤ □二□レ□□一　⑥ □二□□レ□　⑦ □三□二□一□レ□

⑧ □下□三□二□□レ□レ□上　⑨ □下□二□一□中□レ□

2 □の中の読む順番を示す数字に従って、返り点をつけよ。

① 1 2 5 3 4　② 5 4 1 2 3　③ 5 1 4 2 3

④ 2 1 6 3 5 4　⑤ 5 3 4 1 2　⑥ 7 1 4 2 3 5 6

⑦ 7 1 6 5 4 2 3　⑧ 6 3 1 2 5 4　⑨ 8 1 7 4 2 3 5 6

3 次の文の読み方をすべてひらがなにして示せ。

① 有レ備ヘ無シレ憂ヒ。〔　　〕

② 雖モレ不トレ中アタラ不レ遠カラ。〔　　〕

③ 尽クシテ二人事ヲ一待ツ二天命ヲ一。〔　　〕

④ 欲スレ二改メレ推ヲ作ナサントスル上ニ敲カント。〔　　〕

⑤ 客ニ有リ下能ク為スニ雞鳴ヲ者上。〔　　〕

⑥ 秦人恐レニ喝ス諸侯ヲ。〔　　〕

4 下段の読み方を参照して、左の漢文に訓点（返り点と送りがな・句読点）をつけよ。

① 吾日三省吾身。

② 不入虎穴不得虎子。

③ 寡人不復釈子。

④ 不為児孫買美田。

⑤ 為撃破沛公軍。

⑥ 恥功名不顕于天下。

〈口語訳〉

① 私は毎日、自分の身について何度も反省する。

② 虎の住むほら穴に入って行くような危険を冒さなければ、功名は得られない。

③ 私は二度とはあなたを許さない。（寡人＝王侯の謙称）

④ 子孫に財産を残してもかえって安楽な生活に慣れ、精神が安きに流れるから、残さない。

⑤ 沛公の軍隊を打ち破ろう。

⑥ 名声が天下にあらわれないのを恥ずかしく思う。

・吾日に吾が身を三省す。

・虎穴に入らずんば虎子を得ず。

・寡人復た子を釈さず。

・児孫の為に美田を買はず。

・沛公の軍を撃破することを為さん。

・功名の天下に顕はれざるを恥づ。

3 助字（助辞）

日本語の接続詞や助詞・助動詞、また英語の前置詞などのような働きをする語を「助字」という。助字のうち、訓読の際、ふつうは読まない字のことを特に「置き字」ということがある。

主な置き字

（ふつうは読まない。）

矣。 焉。	○文末につく。 ○意味は 断定 完了 強意

○朝ニ聞レ道ヲ、夕ニ死ストモ可ナリ矣。〔（朝人の行うべき正しい道を聞けたら、その晩に死んでもよろしい。）〕

○三人行ケバ、必ズ有リ我ガ師一焉。〔（三人という少人数ではあるが同じ道を行けば、きっとそこに先生とすべき人がいる。）〕

問 〔　〕に読み方をすべてひらがなで書け。

於 于 乎 （名詞）	○前置詞のような働きをする。 ○意味は 目的・対象 起点・場所 時間・理由 受身・比較 など。
而	○接続の働きをする。 ○順接と逆接がある。

○千里ノ行ハ始マル於足下ニ。〔（千里の遠い道のりも、足下の一歩から始まる。）〕

○夫差ハ敗レ越ヲ于夫椒ニ。〔（呉王夫差は、越の国を夫椒という所で打ち破った。）〕

○小人之学ハ、入リテ乎耳ニ、出ソ乎口ニ。〔（つまらぬ人間の学問は、耳から入ってすぐ口から出て、何も残らない。）〕

○樹キ欲スレドモ静カナラント而風不ル止マ。〔（樹が静かにしていようと思っても風が止んでくれない。）〕

重要な助字

（多くは読む。）

之（の）	○主として修飾の関係・主格の関係を示す。（助詞「の」の用法と似る）
者（は・もの・こと）	○主として主語を提示し強める。
也（なり・や）	○断定のときは「なり」 ○疑問・反語・強調・感動のときは「や」

○母之愛スル子ヲ也ヤ倍レ父ニ。〔（母親が子供を愛するその深さは父親の倍もある。）〕

○教化ハ者国家之急務也ナリ。〔（教育による導きこそ、国家の先ずなすべき仕事である。）〕

○見テ義ヲ不ルハセ為ル無キ勇也ナリ。〔（人として行うべき正しいことと知りながら行わないのは、真の勇気がないのである。）〕

○大ナル哉カナ、堯ゲウ之為タルレ君也ヤ。〔（偉大なものだなあ、堯の天子としての姿は。）〕

○そのほか次のような助字がある。これらはすべて文末につく。詳しくは「二　基本の句形」で説明する。

――（哉・乎・夫）。「感動」の場合には、読み方は「――かな」。

――（已・耳・爾など）。「限定・強調」の場合には、読み方は「のみ」。

――乎・邪・耶 / 与・哉・歟。「疑問・反語」の場合には読み方は ――か / ――や

4 書き下し文

〔漢文を、読んだそのままの形で、漢字とひらがなとを交じえて書き改めた文を、書き下し文という。〕

1	送りがなはひらがなに書き改める。
2	日本文の助詞・助動詞にあたる漢字はひらがなに書き改める。
3	読まれていない漢字（置き字）は書き下し文にも書かない。
4	再読文字（⇩p.12）は、最初の読みの部分（副詞）は漢字で書き、二度めの読みの部分（助動詞または動詞）はひらがなで書く。

○柔能勝レ剛ニ。……（書き下し文）柔能く剛に勝つ。

○病ハ従レ口入、禍ハ従レ口出ヅ。…（書き下し文）病は口より入り、禍は口より出づ。

○学ハ不レ可ニ以テ已ム。……（書き下し文）学は以て已むべからず。

○霜葉ハ紅ナリニ於テ二月ノ花ヨリモ一。……（書き下し文）霜葉は二月の花よりも紅なり。

○井蛙ハ不レ可カラ三以テ語ルニ於テ海ヲ一。…（書き下し文）井蛙は以て海を語るべからず。

○未ダ嘗テ敗北セ一。……（書き下し文）未だ嘗て敗北せず。

◆注意◆

(1) 主語・目的語・補語の位置に名詞以外の語句があるときは、「――連体形＋（コト・モノ）」のように名詞化する。

(2) 述語の位置に活用語として読まない語句があるときは、「ナリ・タリ・ス」などを送りがなとしてつけ、活用語化する。

○鳥飛ブコト急ナリ。　鳥飛ぶこと急なり。

○破ルニ山中ノ賊ヲ一易シ、破ルニ心中ノ賊ヲ一難シ。　山中の賊を破ることは易く、心中の賊を破ることは難し。

○佳兵者不祥之器ナリ。　佳兵は不祥の器なり。（佳兵＝すぐれた武器）

基本練習

1 次の漢文を書き下し文に改めよ。

① 仁人心也。（　　）

② 人無ニ遠慮一、必有ニ近憂一。（　　）

③ 欲レ与ヘントスル恐レ見レ欺ムカ。（　　）

④ 使シニ玉人ヲシテ攻ム玉ヲ。（玉を加工する職人）（　　）

⑤ 得テ天下之英才ヲ一而教ヘ育ス之ヲ。（　　）

⑥ 過チテハ則チ宜シク改ムレ之ヲ也。（　　）

2 次の書き下し文に従って、下の漢文に訓点をつけよ。

① 彼を知り己を知れば　百戦すれども殆からず。　○知彼知己百戦不殆。

② 仰いでは天に愧ぢず、俯しては人に怍ぢず。　○仰不愧於天、俯不怍於人。

③ 悪の小なるを以て之を為すこと勿かれ。　○勿以悪小而為之。

④ 衆狙の己に馴れざらんことを恐るるなり。（多くの狙が）　○恐衆狙之不馴於己也。

⑤ 君子（は）言に訥にして行ひに敏ならんと欲す。　○君子欲訥於言而敏於行。